

♪ 2021年度 *poco a poco* ♪

Nr. 24 2022年2月10日(木)

文責:プファイル・辰巳

## マスクと共に・・・

マスクをつけての学校生活も長くなりました。音楽の時間中、歌をうたう時も、お話や音楽を聴くときもマスクを着けたまま。リコーダーや鍵盤ハーモニカを吹くときだけ、ほんの短い時間、マスクを外しますが、間隔を開けたり、時間差をつけたりしながら、演奏しています。そして、定期的な換気。音楽室は特に寒いと感じるようで、上着やひざ掛け持参の子も多い状況です。マスクをつけたり外したりする手間も面倒なものですが、子どもたちはとてもけなげにルールを守っていて、感心します。マスク無しで、伸び伸びと歌える日が早く戻ってきて欲しいと願う毎日です。



## 3学期 ミニコンサート

ぽこあぽこ23号にて、3学期ミニコンサートの開催についてのお知らせと申込票を掲載しました。あれこれ思案の結果、今回は授業時間内にそれぞれの学年で発表し、可能ならば参観とオンラインで、参観が難しい場合はオンラインのみで演奏の様子を見ていただくことにいたしました。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。参観の細かな日程等は、子どもたちの申し込み状況を見て、なるべく早くお知らせできるようにしたいと思っています。

申込締め切りは、明日**2月11日(金)**です。よろしくお願いいたします。

## 音楽こぼれ話 <その時、作曲家は・・・ ③>

### G.F.ヘンデル 「王宮の花火の音楽」 >

前回はJ.S.バッハのお話でしたが、ドイツの作曲家でもうひとり、同じ年の大作曲家がいます。ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデルです。バッハとヘンデルは、生涯や作風が対照的なので、しばしば比較されます。バッハはドイツのテューリンゲン地方から遠く離れることはありませんでしたが、ヘンデルはイタリアやイギリスに在任し、最後はイギリス人に帰化した国際人でした。また、バッハが厳格な教会音楽を多数作曲したのに対し、ヘンデルは華やかなオペラや世俗的な曲をたくさん作曲しました。

その中から今回取り上げるのは、管弦楽組曲「王宮の花火の音楽(HWV351)」です。1712年からすでにロンドンに在任し、イギリス王室の信頼も得ていたヘンデルのもとに、イギリス国王ジョージ2世から作曲の依頼がありました。1748年のことです。この年オーストリア継承戦争が終結し、イギリス・フランス・オランダ間で和約が結ばれたことをお祝いするための音楽です。ジョージ2世はロンドンのグリーンパークで大々的な花火大会を計画しており、それに相応しい音楽をヘンデルに作曲してくれるよう依頼したのです。



こうして出来上がったのが、お祝いムードにぴったりの華やかさを持ち、さらに勇壮で品格も備えた名曲「王宮の花火の音楽」です。この曲よりも30年以上も前に作曲された「水上の音楽」(テムズ川でのイギリス王の舟遊びのために作曲されたそうです。)と共に、ヘンデルの曲としては大変人気が高く、現代でも華やかな式典で演奏される機会も多いようです。

花火大会のリハーサルで初演された時は、ロンドン橋が大渋滞するほどの人々が集まり、演奏も花火も成功しました。ところが、肝心の本番では、花火がうまく点火せず失敗に終わり、ボヤ騒ぎまで起こって残念な結果になったそうです。

だからというわけではないと思いますが、ヘンデルはこの「王宮の花火の音楽」を1ヶ月後、それまでの軍楽隊用の編成から、管弦楽器編成に編曲しなおしたものを披露したそうです。

ヘンデルはバッハより10年ほど長生きして、1759年に世を去りましたが、お墓はロンドンのウエストミンスター寺院内にあります。